

な か ま

発行
佐倉市立中央公民館
な か ま 編 集 係

〒285-0025
佐倉市 錦木町 198-3
電話 (043) 485-1801

2 ページ おけらのたわごと 永見 一 薄れゆく季節感 山根百合子
3 ページ ウォーキングで知ること 鈴木文次郎 クブチ沙漠の植林 平田京子

孀恋村の思い出

坪井 浩

私の母の生家は群馬県吾妻郡孀恋村である。素晴らしい村の名前である。村民憲章の「なげかけることばにほほえみを、さしだすその手にぬくもりを」を基に村作りを進めている。広大な自然に恵まれた高原の村である。

周りの環境は南方面に、現在も噴煙を上げ活発な火山活動をしている浅間山がある。かつての火山活動の名残の火山灰地は現在キャベツ産地として有名になった。浅間山の西方隣りは、長野との県境で、地蔵峠がある。この近辺はかつて佐久の鉄平石の産地であった。鉄平石とは溶岩が冷却する過程で板状の割れ目即ち板状節理の発達した安山岩である。用途は、門柱、敷石等に使われている。私の父は長野県佐久出身で、この鉄平石の仕事に従事して

いた。若い時分、地蔵峠の辺りで働いていた時に母と知り合った。母曰く「本家の当主に反対されたのを駆け落ちしてでも」というエピソードの末所帯を持ったとのこと。大正時代としてはかなりハイカラな両親の出会いだった。

さらに西方面に目を移すとこちら長野県境の鳥居峠、百名山で知られる四阿山あずまやさんへと続く、そして北側には、天下の名湯草津温泉を従えた草津白根山系が広がっている。私が孀恋村を初めて訪ねたのは、六歳頃であった。当時私達は東京に居住しており我が家の食料品買い出しに、母と一緒に、信越線、草軽電鉄と乗り継ぐのが、大変な思い出だった。石炭をくべて走る信越線の蒸気機関車を間近に見た事は、私にとって強烈な思い出であり、幼心に将来は蒸気機関車の機関

士になりたいと強く思ったものである。

草軽電鉄は通称「軽便」と呼ばれ、軽井沢〜草津の全線五十五キロメートルを実に三時間半かけてゆっくりと走った高原鉄道であった。昭和三十七年廃線となった。私は子供心にも軽井沢の森をぬけ、雄大な高原を走る牧歌的な電車の旅を「何と素晴らしい」と感じた。忘れ去ることの出来ないほどの思い出があった。

母が「農閑期には草津温泉へ保養に行ったものだよ」と常に言っていたことがきっかけで、十五年程前に草津温泉を第二の故郷としてささやかな住まいを求めた。母を保養に連れ出したのは、実に彼女が逝く四年前の九十五歳のことであった。春夏秋冬、この地域の風景は私にとって心休まる場所である。



(編集委員)

おけらのたわごと

大正から昭和にかけて、子供の遊びはほんとうに幼稚であり、原始的でもあった。

江戸の名残りがかすかにあった昭和一桁は昔風の、もの、人、場所が東京中に数え切れない程残っていて、それが新しくなり、進歩するのは何年先のことやら、解らないとさえ思えた。

遊びの種類も外のものが多い、鬼ごっこ、かくれんぼ、石けり、めんこ、人とり、下がって、どろぼうごっこ、根木も遊びの一種だった。根木は江戸時代の子供が遊んだものの形と方法がそっくり伝えられたものである。

長さ二、三十センチ、直径三、四センチの木の先を鋭く削って、それを土のやわらかな所へ二、三メートル先から投げて、先に突きささっている相手の根木を倒した者が勝ちなのである。その根木の場

所を作るのに随分苦労した。只でさえぬかっている道が根木でこねまわされるのだから、

根木場がだんだん広がって、しまいに歩く所がない程ひどくなった。

乾いている時は、わざわざ水を汲んできて、適当にぬかみを作ってから始めるので狭い横丁では具合が悪く、どうしても往来の一部を拝借する次第になる。

学校から帰るとカバンを放り出し、早速紺の着物に着替え木刀をもってとび出す。神社に集った悪童は、着物組は勤皇、洋服組は斬られ役の佐幕方となる。夕方には、すり疵、泥まみれ、これが毎日の繰り返し。

今の子供等は外に出れば怖いことばかり、塾通い、テレビゲームにしがみつく。文明の進歩がはたして私たちに幸せか、考えずにはいられない。

(上志津 永見 一)

薄れゆく季節感

暖冬のせい、今年は一月未だ我が家の庭の土手にふきのとうを発見！小さな春見つけたぞ、とばかり一人で興奮してしまつたがなんだか変？そう暦は未だ冬である。以前紀州の有田に住んでいた時も土筆が早々に顔を出して驚かされたこともあった。近年暦どおりの季節感を体感できなくなつたと思うのは私だけだろうか？

故郷金沢では、長い冬が終わり春が来ると梅や桜が一斉に咲き乱れ、人も植物も冬の分厚い衣を脱ぎ捨て、一気に活気づく、喜びの季節に人々は感動したものである。

私の両親も幾年もの年月をかけて、庭の花作りに精をだしたのもその喜びを皆で分かち合うためであつたと思う。

雪融け後に数々の珍しい花々が咲き乱れる庭は、子供の私をもワクワクさせてくれたも

のである。春夏秋と花のシーズンが終わる日までの毎日が私にとっては大発見の連続であつた。

秋になつてたわわに実つた葡萄や蜜柑をもぎ取り、口に入れて満足する頃、ようやく庭にも静けさが戻り、木々は雪つりや雪囲いで冬支度された。それは正に春夏秋冬のはつきりとした季節の移りいを庭先でも感じられた時代だつたと言えよう。単純な私はこの感覚は永遠に私の中で変化しないものと思つていた。

故郷を離れて四十年、暖かい地域で余りにも便利な生活に慣れてしまい、淋しいことにもう四季折々の感動ある季節感を体感出来なくなつてしまつている。佐倉では冬でも畦道にタンポポが咲き、ふきのとうが顔を出すのだから、北陸育ちの私はこの時季いつもカレンダーと睨めっこして戸惑うのである。

(ユーカリが丘 山根百合子)

ウォーキングで 知ること

私がウォーキングを始めてから六年になる。現在は一日一時間、背筋を伸し手を大きく振り大股に速く歩く。できるだけ足も高く上げてと思っ

てはいるが、これは加齢と共に反比例しているが、兎に角

自分流に我家から広範囲に亘るウォーキングをしている。幸い白井は田園地区も多く、歩くのに適した地で、歩くこと

によって、色々なことを知るようになり、歩きは政治に繋がるものだと言うことを躰で知った。

政治的に感じることは多々有り、紙面上割愛するがその中で一つ、我が白井地区の開発の凄まじさに驚く。

三年で様変わり、新興住宅地

になっていく。こんなに住宅を造って売れるのかなーと

思うくらい、これでもカー

これでもカー と開発と建築が進行し続けられている。市の人口統計表を見ても、その割に人口増にはなっていない。

一方、古い住宅地には空家が目立ち、常に兩戸が閉まつたままであったりで、恐らく古いマンションも同じであるう。

古いものの再活用を優先すれば、公的設備は完備している訳だから、開発もかなり抑えられると思うのだが…。

先生と言われる方も、行政の方も車に乗ってばかりおらず市内を自分の足で継続的に歩いて観たら、住民に密着した本場の政治が、もつと解かるものと、ウォッチングしながら感じウォーキングをしている。

(白井田 鈴木文次郎)



クブチ沙漠の植林

すっかりした環境意識も無くただ興味本位で植林に出かけたのが十年前。北京から寝台車で包頭まで十五時間、さらに植林地の恩格貝までガタゴトバスに揺られて五時間。

水の少ない大河を荷物背負って渡ったこともある。年間気温差は四十度から零下四十度という激しい中で地表は乾燥

しきつた砂、それでも育つように七十センチ以上掘る。北京ポプラの葉を全て切り落とした苗木に保水剤をつけて植

え込む。苗木にしてあげられることは植林時バケツ一杯の水と、あとは無事に根付くように祈ることのみ。数年後に

森になっていけばバン万歳。年によつては数キロも風で沙漠が動き植林地が埋まってしまうこともしばしば。植林する時期が悪く植樹が全滅することもある。クブチ沙漠の砂は小麦粉と同じように粒

子が細かい、防砂カバーをしていないカメラは一週間も滞在すると壊れてしまう。風が強くと、目や口に砂が入り植林が思うようにはかどらないことも多い中、自分たちの植えた木が無事に育つてくれると何ともいえない満足感に満たされる。

この植林で私たちがいつも楽しみにしていることは地元の人との交流と小学校、内蒙古大学の訪問、そして植林のご褒美に自然がくれる満天の星空。手を出せば届きそうな星空の下での音楽会。馬頭琴の音が響き透き通る。

文明の利器といえるものは植林の最前線では何も無いが、生かされている喜びをもつとも強く感じる。今は沙漠の近くまで道路ができ橋もできた。

百年後、二百年後の地球を夢見て時間と体力とお金があれば、これからも仲間と出かけに行きたい。

(井野 平田京子)

4月の黒板

『なかま』原稿募集のお知らせ

『なかま』の2・3面は、市内の皆様の投稿によって作られています。原稿は随時募集しています。

【原稿規定】 字数 650字(13字×50行)以内。ワープロによる原稿(縦書き)でも結構です。

内容 随筆・・・日常の出来事、生活の中で発見したこと、気付いたこと、いただいた原稿は、掲載するにあたり常用漢字への変更や、句読点等修正させていただきます。

『なかま』3月号のお詫びと訂正について

『なかま』3月号(No.365)に誤りがありました。お詫びして下記のとおり訂正いたします。

2ページ 城と呼んではいけない「お城」上段9行目 (誤)土井^{どい}構^{がまえ} (正)土^{どい}居^{がまえ}構

お問い合わせ 中央公民館 TEL 485 - 1801 (第2・第4月曜日は休館日です)

URL <http://www.city.sakura.lg.jp/kominkan/cyuou/index.htm>

わくわく道

テレビ番組の捏造が問題になった。公共の電波を借りる放送局が視聴者のダイエツトという弱みにつけ入り、「うそ」「いつわり」の番組を放送したことから発覚した。

なぜこのようなことが起こるのか。視聴率主義だけで片付けるにはいささか抵抗があり、ほかの要因を考えてみた。その最たるものが「テレビ界の驕り」ではなからうかとい

う結論に至った。テレビ界は長年マスメディアとしてはトップに君臨してきた。住人たちはその座をいつの間にか自分たちの力量と勘違いし、心に驕りが芽生え、その結果社会の規範から逸脱することになつてしまったのだらう。

いままでこのような驕りが企業の盛衰にかかわる例を多く見聞してきた。驕れるもの久しからず、か?!

あがとき



暖冬の次は暖春だそうです。城址公園の桜はいつもより早く咲く(もう咲いた?)かもしれません。花見の日程を決めるのに各グループの幹事さんは大変苦労されたようです。『なかま』4月号は永見さん「おけらのたわごと」、山根さん「薄れゆく季節感」、鈴木さん「ウォーキングで知る」と、平田さん「クブチ沙漠の

植林」と春のムード一杯の原稿が揃いました。ありがとうございます。

皆様からご投稿いただいた原稿はタイピングよく、なるべく早く掲載するよう努力しているつもりですが、一部の方にはご迷惑をお掛けしているかもしれません。

どうか今後とも『なかま』には暖かい思いやりとご支援を賜りますようお願い申し上げます。

(島田)